遠野が誇る芸能の祭典
さあ、次の50年へ。

遠野まつりは、「ふるさと」

遠野まつり企画運営委員長
赤坂康紀さん（大工町）

やるかやらないか、やれるかやれないか。いろいろな意見の中で、みんなの「やりたい思い」と、腹の底にある「どうにかしてできないかという思い」が形になったのが今年のまつり。企画検討チームを立ち上げ、何度も練ったキャッチフレーズ「躍動 演舞 集え この先の未来も」。そのとおりのまつりでした。集まれば楽しい、やればおもしろいと再確認できたのではないでしょうか。

まつりは「ふるさと」。まつりのために帰ってきたり、知らなかった人を覚えたり、地域を結んでくれます。コロナ禍で参加できず悔しい思いをした人もいると思います。それでも、衣装展示など新しい形でまつりを盛り上げてくれた団体や商店・企業もありました。今年の経験を生かし、来年こそは盛大に！

50th Anniversary Tonomaturi

ジーンと胸を打つ感動 — Mikoshi

烏合烈火衆 代表
福田哲也さん（中央通り）

どの団体にも属さない若者が何かしようと立ち上げたのが烈火衆です。江戸担ぎの神輿は遠野の伝統芸能ではないかもしれませんが、まつりに合わせて地元に帰ってきてくれる。それが誇りです。

初日のパレードは、通常50人で担ぐのを10人で。途中で断念せざるを得ませんでした。担ぎきれなかった私たちに拍手が。「大変だったでしょ」「良かったよ」。ジーンとしました。やらない後悔より、やる後悔を。そんな気持ちで過ごした２日間でした。

遠野がひとつになれる瞬間 — Shishiodori

長野獅子踊り保存会 会長
佐藤清正さん（小友町）

長野獅子は遠野で一番古いと言われ、起源は奈良時代。欠かさずまつりに参加してきました。郷土芸能の伝承に一番大事な時期が中学の３年間。コロナ禍ですが、意義ある開催だったと思います。

まつりは、仲間が集まれる輪です。他地域とコミュニケーションをとり、自分たちの団体の良さを見せようと互いに頑張ることができます。音が聞こえれば観客も一緒に踊り出したくなるような、それが遠野まつり。輪が広がり、遠野がひとつになれる瞬間です。

遠野まつりは格別 — Kagura

大出早池峰神楽保存会
石橋史朗さん（附馬牛町）
左上から育子さん、望ちゃん、菜月ちゃん、健太朗くん

移住し５年。転勤で遠野に来て初めて見たまつりは、感動の一言でした。神楽や獅子、手踊りなどいろいろな団体が次から次に出てくる。全国でも他にないのでは。

まつりに向けた練習で夜遅くなっても、「明日も仕事、学校がんばろう」と励まし合い、家族の団結が深まったように思います。

まつりの２日間、体力的に苦しかったですが、やっぱり格別。まちの皆さんにも温かく迎え入れてもらい感激しました。たくさんの人にありがとうと伝えたいです。

伝統を受け継いでいくために — Nanbubayashi

遠野南部ばやし上組町保存会
祭典委員長
河内京治さん（上組町）

コロナ禍、参加団体、人数も少なく寂しさはありましたが、やって良かった。私たちが参加を決めた一番の理由は「伝統継承」。３年やらなければ、まつりを経験しないまま学校を卒業してしまう子もいます。まつりは地域のコミュニケーションの場であり、子どもたちが踊りを発表する場でもあります。先輩後輩、若者と大人が交流できる貴重な機会です。子どもたちが大きくなったら、さらにその下の子たちに教えていく。それを見るのも楽しみです。

since 1972→2022

巻頭特集
50年目の遠野まつり
2022/9/17・18